

## 「酪農に思いをはせて」

高知県高知農業高等学校  
畜産総合科 3年 小松 明里

私は中学の時、受験をするならば農業高校への進学をしようと決めました。しかし、そのときは農業や特に畜産に興味や関心があったわけではありません。きっかけは、「入学しやすそう」だったり、学校が家に近いという中身の無いものでした。

入学してすぐ初めての實習がありました。トウモロコシの栽培です。中学校でも理科などでなんだかやっていそうな内容でしたが、畑に行ってみると、広大な畑に圧倒されました。種を蒔くことから始めますが、その量が半端ではありません。他にも飼料用の畑や、3年生が課題研究で豚の飼料にするための芋を栽培している畑などいくつもの畑が点在しています。この畑の規模、畑の数、私にとっての農業高校での「衝撃」が始まりました。「衝撃」はトウモロコシの成長とともにどんどん感じるようになり、「農業ってすごい!、やばい!ちょっと楽しい!」と思うようになりました。7月に入り鬱蒼と茂るトウモロコシに大きな実がいくつも実りました。収穫してすぐ、大きな鍋で湯がいて食べましたが、トウモロコシがこんなにもおいしいとは思ったことがなく、おいしさにびっくりするとともに感激をしたのを覚えています。

やがて、鶏など畜産の教科を専門的にやるようになりました。放課後の實習では、先輩に混じって豚や牛の管理も入ってきました。まず最初に与えられたのは、かわいい羽毛のような鶏のヒナです。温度管理、餌の管理、水の管理。先生は私たちが餌を与えるのを忘れても手伝ってくれません。命を育てるといのは責任があることを何度も感じました。そのヒナは2ヶ月というものすごい早さで成長しました。ブロイラーなので、食肉として食することを目的としています。私は、この鶏を解体して「いただきます」と食前に言う本当の意味を肌で感じました。

2学期の中盤には、もう入学した当初とは全く違う気持ちの自分がいました。「農業って深い!畜産をもっと勉強したい」と思うようになっていたのです。

2年生になると、今度は養豚について学ぶようになりました。なにより衝撃を受けたのが去勢です。離乳直前の子豚を、麻酔もしないでメスやカミソリで精巣を切り離します。豚を仰向けにして足をみんなで、押さえつけます。暴れる豚を押さえつけるのは私たちの役目です。先生は、私たちに手順をおしえたいのかゆっくりやるような気がします。何頭もの去勢が終わった頃には、くたくたです。しかしさっき精巣の切除をした豚はもう元気にじゃれ合っているではありませんか、その姿も「衝撃」でした。豚は、私たちの食卓にあがるまでには命を提供するとともに、多くの痛みも経験していることを知りました。成長した豚を出荷して、枝肉になって戻ってくると、ベーコンにしたりソーセージに加工します。産業動物をかわいそうだと思う前に、精一杯の感謝は何だろうか考えるようになりました。おいしく頂くということではないかと自分なりの答えを出すようになりましたが、その答えからはかけ離れた現代の食生活を腹立たしく感じる

---

ようになりました。一人一人が農産物や海産物に対してもっとしっかり知識を持つべきではないでしょうか。

やがて、夏休みに大きなチャンスが訪れました。それは、希望者のみが参加できる高知県から北海道の酪農研修の募集です。わたしは、もっと色々なことを見たり、学びたいと思うようになっていたので、「行くしかない」と手を挙げました。日差しがまぶしくまさに暑い夏の高知県から少し肌寒さも感じる北海道に到着しました。ホームステイ先はジャガイモ畑の管理と、ホルスタインを40頭あまり搾乳するのを手伝いました。近隣の農家よりは規模が小さいとのことでしたが、私にはまた「衝撃」の毎日でした。何よりも乳量が多く、ミルクを集めるタンクの大きさに驚きました。学校はわずか7頭しか搾乳をしませんので、作業も果てしなく感じました。滞在中に乳量の少ない牛を出荷してしまう場面を見てしまいました。経営者の苦悩や難しさも身をもって感じる場面でした。家畜を扱うといっても、儲けるためだけに飼っているのではなく、愛情をかけて家族のように育てていることも痛切に感じた研修でした。なおさら、子供が取れない、ミルクが出ない、病気になってしまうということは飼育している人たちが一番くるしいことなのです。ホームステイ先では、お父さんが牛の体をきれいに保つためのノウハウや、餌を効率的に与えるための方法、上手なミルクカーの付け方など丁寧に教えてくれました。教科書には載っていないことばかりです。

北海道研修で酪農に対する興味は膨らむばかりでした。

3年になり専門教科は酪農の分野になりました。牛の生理生体から始まり、経営に至るまで難しいですが興味のある教科です。2年生の体験を元に搾乳実習や牛のブラッシングはお手の物です。さらに、体力には自信があるので、牧草の刈り入れや積み込みは先頭になってやっています。3年生になると乳牛の共進会にも出場するので、牛をひっぱたりも練習をしています。あの大きな牛が私の手綱さばきで言うことを聞くのは感動します。そして、勉強を積むにつれ、今その酪農の道に進みたいと夢は大きく膨らんでいます。しかし、どうすればよいのかわかりません。大きい夢があるのに漠然としている、何かはっきりしない毎日でした。周囲の友達は大進学に向けて邁進し始めました。大学への進学なのか、専門的な進路へ進むべきなのか、しかし、私が持っているのは酪農に対する興味だけです。

答えのない道をただゆっくりと歩いているような毎日でした。そんな私に、先生は突然無茶なことを言ってきました。「夏休みにニュージーランドいかん?」。卒業生でニュージーランドで酪農をやっている方がいるから、自分の目で見てこいというのです。卒業生は32歳で、単身向こうにわたり、従業員として牧場で働いて約6年で今の経営まで持ってきたガッツのある方だそうです。搾乳の頭数が780頭というのには驚きました。先生は「なせばなるんだ」、「夢が大事だ」と私に言ってくれているような気がします。出発まで今は英語の勉強に明け暮れ、とにかく足を引っ張らないように一ヶ月がんばってこようと思っています。進路については、牧場で

---

---

働いている人や先輩にたくさん聞いてから、しっかりと決めようと、いまはワクワクした気分がいっぱいです。

しかし、漠然と入学したあのことろ、農業のことも何も知らず、卒業ができたらいいくらいにしか高校生活を思っていた私が、3年生になってニュージーランドで酪農を体験しているとは夢にも思っていませんでしたし、想像した人はいないでしょう。多くのチャンスのおかげで酪農の魅力を今どんどん膨らませ、酪農に夢を乗せていきたいと考えています。「行動の先に結果がある」、今は身をもってこの言葉を実践したいと思っています。

---